

永禄四年以来、人質を出して大友氏に従ってきた長野筑後守（種信カ）が、永禄八年五月、敵対するようになったため、大友宗麟は田原親宏・親賢の国東郡衆を送って、三か月も長野里城を攻め、さらに奥城の三岳を攻めて降伏させた。

#### 西郷隆頼の再挙

永禄十一年四月、三岳に拠る長野・田原勢を包囲する形で、門司城督の仁保隆慰が西大野宮山（小倉南区山本）に、また、大内家の妙見岳城督で、永禄四年毛利方に寝返って松山城に籠城していた杉因幡守降哉と、永禄二年八月に挙兵し失敗して中国へ亡命した西郷遠江守降頼が大坂山（飯岳、標高五七三〇）に挙兵した。宮山や大坂山は、豊後勢の攻撃を受けて、間もなく陥落し、西郷隆頼・杉降哉は降伏した。この年七月のことであろうか、西郷隆頼は、大友宗麟から豊前国内で五〇町分を預置あずかられている。ついで両田原軍は杉七郎重良（杉重輔の子）の籠る松山城を包囲した。

#### 三岳の合戦

ここに至って、北口の尼子氏の脅威きょうゐから解放された毛利氏が大軍を九州へ動かすことになり、元就の子である小早川隆景・吉川元春が海陸の兵を率いて、まず長野氏と田原勢の籠る三岳を包囲した。

長野氏は三岳と等覚寺（荻田町山口）の要害を嚴重にして楯籠ったので、毛利勢は両城の中間に宮尾城を築き、三岳城内に調略を行って寝返りする者を待った。やがて、三岳城内に意見の対立が生じ、毛利軍を引き入れる者があって、惨たんたる戦闘が展開され、長野兵部少輔・同左京は戦死し、男女数千人が殺害されたと『到津氏覚書』は伝聞を記している。等覚寺城も間もなく陥落して、豊後勢と共に、長野三河守助守も豊後へ逃亡した。このため、豊前の西半分は毛利氏の支配するところと

なった。

毛利両川軍は三岳から、麻生氏の拠る山鹿を経て宗像・立花へと進出し、立花城を包囲した。

永禄十一年十一月、大友氏と和睦して臣従していた秋月種実が、毛利氏の調略によって寝返り、千手隆惟を急襲して殺害した。毛利勢は馬見岳（嘉穂町、九七八〇）の要害を嚴重にして、高橋鑑種と連絡をとって比叡方面を抄掠し、久留米の高良山に出馬していた大友宗麟の後方を遮断しようとした。

#### 五 大友・毛利の立花城争奪戦

永禄十一年（一五六八）九月、毛利方は一〇万余の兵をもって立花城を遠巻きにした。大友方も豊筑の軍勢五万五八〇〇余を送って後ろ巻きした。これは『大友興廢記』の数字であるが、毛利方の『江田文書』（『萩藩御』  
『問』所収）によると、毛利方五万余騎、大友方一二万八〇〇〇と数字が逆となっている。いずれにせよ、中国・九州各地から空前の大軍が立花城の中に置いて対峙したのである。

立花城は、建武年間（二三三—三三六）、大友氏泰の兄で、名代を務めた大友貞載を祖とする大友一族が、筑前国の大友氏の所領であった糸島・博多・香椎付近を管理し、立花城に拠ったことから立花氏を称したという。十五世紀前半以来、この地を大内氏が何回か侵したから、大友家では、掟書で、この城を取るか否かは熟慮が必要であると説いている（『大友義隆』  
『系々』）。大内義興の時代から、国東の領主田原親述・親董父子が、大友氏と対立して、大内家を頼って亡命生活を送っているが、その十六

世紀前半を立花城に住んで立花氏と称したと『田原系図』に見える。このころの城主立花鑑載は、立花氏が断絶したので、一族の中から迎えられたといわれる。

### 立花鑑載の変心

立花鑑載が高橋鑑種の強引な調略によって、毛利氏に内通しているという風説を聞いて、大友宗麟は豊後から家老の戸次鑑連・吉弘鑑理を送って、立花城を占領し、怒留湯主殿助を立花西城督として、鑑載の動きを監視させた。

永禄十一年六月、立花鑑載は城督の抛る立花西岳を攻撃してこれを奪い、糸島の武将原田親種と共に籠城した。大友氏はただちに立花城を包囲攻撃し、宗像方面へ落ち行く立花鑑載を見つけて襲いかかり斬首した。

それから三か月後、中国勢が立花城を包囲し、それを豊後の救援軍が後ろ巻きしたのである。しかし、十重二十重の毛利方包囲網の前に、大友方は多々良川さえ渡ることができず、城内の大友方は孤立したまま、時日を過ごした。毛利方は、出雲白鹿城攻めに使った金掘り工を石見大森銀山などから連れてきて、地中を掘って立花城の城砦に迫り、水手を切り、城柵を掘り崩して本陣へ迫った。城中は水が枯渇して先ゆきが見え、毛利方からでも「見せかけ」(『赤川文書』四月二十日)とわかる動きが多くなってきたので、落城も程近いと観測していたところ、高良山まで出陣していた大友宗麟も、立花城の放棄を許した。永禄十二年閏五月三日、田北民部丞鑑益、田北刑部丞鎮周・鶴原掃部・臼杵進上允・立花弥七郎は降伏した。毛利方は彼らを丁重に志賀島の太友陣中に夫丸・雑具と共に送り届けた(『赤川文書』)。

立花城が毛利方の手に落ちて、大友方の後ろ巻きは続けられたま

ま、両者とも、戦局の転換を模索して、後方攪乱を狙うようになる。

### 六 大内輝弘の挙兵



大内輝弘の花押

切ろうとした(『別津文書』永禄十年閏五月二十一日)。

大友方は、永禄八年(二五六五)六月、屋代島(周防大島)で挙兵して失敗し豊後へ逃れてきた大内輝弘を防長へ侵入させようとした。輝弘の父高弘は大内義興の弟水上山興隆寺別当尊光で家督の座を狙って失敗し、豊後へ亡命して還俗していた。

輝弘は豊前の恵良・吉村・屋方・緒方等の新興領主層を被官として、知行地の約束手形を乱発しながら、渡海の準備を進めた。大友宗麟は、豊後水軍の薬師寺鎮興らに予め防長沿岸を抄掠させ、ついで、大内輝弘軍の警固船大将に任じた。

永禄十二年十月十一日、大内輝弘は兵五〇〇余(一説三〇〇〇)と共に、周防秋穂浦(小郡町)に上陸し、翌十二日に山口に侵入して放火した。十三日、高嶺城攻略に取り懸かったが反撃されて、川向かいの築山に桶籠った。防長には、かねて大友方の調略が行われていたらしく、各地で一揆が蜂起し、油断できない形勢となった(『船越』)。